# 「男、突っ走る！」

第90回

第一稿

作・壽倉　雅

# 登場人物

木内　雅也（23）　『オフィスツリーイン』代表

国枝　佐代子（58）　『スリジェネ』総合プロデューサー
山中　敦夫（43）　劇団主宰者
田所　俊子（62）　市民映画プロデューサー
阿川　武久（37）　振付師

野倉　浩太（21）　『スリジェネ』メンバー
藤田　昇平（21）　『スリジェネ』メンバー
前川　啓司（29）　『スリジェネ』メンバー
山森　直海（18）　『スリジェネ』メンバー
富永　茜（22）　『スリジェネ』メンバー
大坂　美央（16）　『スリジェネ』メンバー
阿川　緑（29）　『スリジェネ』メンバー
坂本　寿梨（19）　『スリジェネ』メンバー

佐藤　麻美（21）　元『スリジェネ』メンバー
橋岡　直政（46）　舞台俳優

1　南福祉センター・全景

2　同・第二会議室

雅也、阿川、茜、寿梨が話している―

―傍らで準備をしている浩太と緑。

寿梨「困ったね、このタイミングでマイキーがケガだなんて」

雅也「本人の話では、通院レベルのケガらしいんだけど、今のところ足を少し引きずるような形じゃないと、歩けないらしい」

茜「（台本を見ながら）私たちと一緒にいる場面では、特に大きな動きもなくて、基本立ちっぱなしのシーンだから、特に問題ないとは思うけど」

阿川「でも、ケガがひどくなる可能性もないとは言えないでしょ。稽古してる間に悪化されても困るしね」

雅也「……これは、一つの案なんですが、マイキーの出てくるシーン、もしケガが治らなかったら、上手の端で板付き状態にして、

電話をするという形で変えられませんか」
阿川「電話か……」
雅也「最初の場面だと、一緒に帰ろうって茜に声かけるために入ってくるでしょ。そこを、電話がかかってくるようにして。スマホで、スピーカーで話すっていう設定にすれば、会話そのものは変更しなくても、三人で会話してるようになると思うけど」
茜「そうだね。上手く行くかどうかは分からないけど、一応今日の稽古でやってみよう」
雅也「マイキーには、今日早めに来てもらうようにお願いしてあるから、本人が来たら、演出変更のこと相談しよう」
寿梨「その次の場面は、どうしよう？」
雅也「ああ……。このシーンは、ジュリがマイキーに怒鳴るシーンだもんね。スピーカーで話してる相手に、感情をぶつけるのは難しいかな……」
寿梨「まあ、それも実際やってみないと分からないけど、ただやっぱり本人じゃなくて、

スマホを見ながらブチギレる演技ができるかどうか……」

雅也「今週と来週しか、稽古はないからね……。これで、マイキーのケガが問題なければ、当初の演出通りで行けるんだけど」

阿川「（浩太と緑に）二人は、どう思う？」

浩太「今日は、そのうっちーの変更案でやってみたらどうですか？　やりづらいと思ったら、当初の案のままにするか、演出部のナオにも意見聞いてみても良いだろうし」

雅也「そうだね。話してるよりも、まずはやってみるのが一番だもんね」

茜「どの演出プランでもできるように、私も頑張る」

寿梨「私も」

雅也「ありがとう。あ、ちなみに先に言っとくけど、くれぐれもマイキーを責めるようなことはしないでね。マイキーだって、確かに自分の不注意でケガをしちゃったわけだけど、それで稽古場の空気がおかしくな

るのは、嫌だから」
緑「うっちー……」
と、啓司が入ってくる。
啓司「おはようございます」
一同「おはようございます」
雅也「マイキー、足大丈夫？」
啓司「まあね。あまり激しく動かすようなことはしないようにって、病院の先生に言われたけど」
雅也「そっか」
浩太「あれ、今日まだミオ来てないけど、どうしたんだろう」
寿梨「今日、主役の三人は午前中からの稽古だったよね」
茜「確かに」
と、雅也のスマホが鳴る――画面を見ると、『南公民館』と書いてある。
雅也「え……？」
茜「どうしたの？」
雅也「（画面を見せて）南公民館から電話」

茜「何で？」
雅也「部屋の予約っていつもとみーがしてくれてるけど、今日午前中から予約した？」
茜「ううん、ちゃんと昼から予約したよ」
雅也「え、じゃあ何だろう、ちょっと出てくるわ」
茜「私も行く。（と浩太に）ごめん浩太、こちょっとよろしく」
浩太「分かった」
雅也と茜、出ていく――啓司、一同に頭を下げている。

3　同・廊下

雅也がスピーカーにした状態で電話に出る――傍らに茜。
雅也「はい、もしもし」
職員の声「もしもし、『スリジェネ』の木内さんのお電話でよろしいでしょうか」
雅也「はい、そうです」
職員の声「私、南公民館の橘と言いますが、

こちらに、大坂美央さんという方がいらっしゃってるんですよ」
雅也「え、ミオがですか？」
職員の声「ちょっと変わりますね」
美央の声「もしもし、うっちー」
雅也「ミオ、どうしたの？」
美央の声「ずっと待っててもも、誰も来ないからどうしたのかなと思って。私、今日スマホ家に忘れてきちゃって、場所確認できなくて」
茜「ミオ？　私、とみーだけど。今日の午前中は、南公民館じゃなくて、線路挟んだ反対側にある南福祉センターだよ」
美央の声「ああ、そっちか。ごめん、今から行くね」
雅也「気を付けておいでよ」
美央の声「うん、分かった」
　と、電話が切れる。
茜「ミオ、間違えて南公民館に行っちゃってたんだ」

雅也「今日の午前は、こっちで稽古するって
こと、昨日ちゃんと連絡すれば良かったね」
茜「稽古日程には、あらかじめ今日の午前は
南福祉センターでやるって書いてあるんだ
もん、それはちゃんと確認しなかったミオ
の責任だよ」
雅也「そっか」
茜「ミオもすぐ来るし、マイキーも来たんな
ら、先に私たちの場面の稽古しちゃおうよ」
雅也「そうだね。ミオとコウタとミドリさん
は、自分たちの場面を自主練習してもらう
形にしよう。今日は、優先的にとみーとマ
イキーとジュリの場面の稽古しなきゃね」
茜「うん」

4　同・第二会議室

美央、浩太、緑が部屋の端で演技の個
人練習をしている。
茜、寿梨、少し離れた場所で啓司が立
っており、稽古をしている――演出席

から見ている雅也と阿川。

N「マイキーのケガの具合を見て、変更用の演出をつけましたが、幸いにもマイキーのケガは問題なく快方に向かっており、翌週に行われた最終稽古では、当初の予定通りの演出で行うことが決まりました」

5　市民会館・全景

N「そして、『市民演劇祭』本番当日……」

6　同・廊下

雅也が歩いている――山中が通りかかる。

山中「うっちー」

雅也「ヤマさん、おはようございます」

山中「おはよう。いよいよだね」

雅也「ええ」

山中「今日は、国枝さんたちにちゃんと見てもらわないとね」

雅也「いろいろハプニングやらトラブルばか

りの五ヶ月半でしたけど、今日はとにかく
メンバーのみんなには、稽古の成果を全力
で発揮してもらえたらと」
山中「そうだな。先月のリハよりも良くなっ
たって思われたいよな、特に国枝さんには」
雅也「（苦笑して）ええ、まあ」
山中「先月のリハの時、演目中に国枝さん、
田所さんとひそひそ話してたんだよ。俺、
あれに腹が立って、あの後注意したんだよ」
雅也「そうだったんですか」
山中「『スリジェネ』の黒歴史になるとか、
いろいろひそひそ話しててさ、うっちーや
他のメンバーが一生懸命やってるのに、そ
れが総合プロデューサーとしての言動なの
かって、怒れてきちゃったよ。鼻を明かし
てやろう、国枝さんの」
雅也「はい」
笑い合う雅也と山中。

7　同・大ホール

観客席に座っている佐代子と田所――
音響席の近くの席に座っている麻美と
橋岡。
田所「（プログラムを見て）いよいよ、次ね」
佐代子「無事に本番が終わりますように」

8　同・控室

それぞれ衣装を着ている茜、浩太、昇
平、啓司、直海、美央、緑、寿梨――
ドアが開き、雅也と阿川が入ってくる。
雅也「今、ヤマさんたちの劇団の演目が終わ
った。今から十分の搬出があって、それが
終わったら、いよいよ俺たちの番です」
一同「はい」
雅也「みんな、これまで演出としては力不足
で、出演者のみんなにはいろんな不満を持
たせたり、不信感を抱かせてしまったこと
もあったと思います。いろんなトラブルや
ハプニングもありました。それでも、今日
までこの作品に向き合ってくれて、本当に

ありがとうございました。これまでの稽古の成果を全力で出し切りましょう」
一同「はいッ」
雅也「よし、円陣組むよ」
と、一同円陣を組む。
雅也「じゃあ、いつもの掛け声でいきます。未来に向かって、僕らッ」
一同「スリジェネ！」

9　同・大ホール
それぞれの席に座っている佐代子、田所、橋岡、麻美――音響席で準備をしている雅也。
麻美「（気づいて）うっちー」
雅也「アサミンッ……。はっしーさんも」
麻美「頑張ってね」
橋岡「楽しみにしてるよ」
雅也「ありがとうございます」
二階の照明席で準備をしている阿川。
阿川「みんな、頑張ってね……」

と、場内が暗くなり、司会のアナウンスが入る。

司会の声「大変長らくお待たせしました。続いては、地元を中心に活動するパフォーマンスグループ『スリジェネ』の皆さんによる演劇作品『一歩前進！』です、どうぞ」

拍手をする観客たち――雅也、音響卓でスイッチを押す。

ＢＧＭが流れ、緞帳が上がる。舞台真ん中に木箱が並べて置かれている。

舞台上手から、美央と茜が出てくる。

直海「終わったねぇ、三学期」

美央「うん」

直海「春休み、どっか行きたいね！」

×　×　×

山中が会場後ろから舞台を眺めている。

×　×　×

浩太「調子はどうだ？」

緑「大丈夫よ。昨日より、大分楽になった」

浩太「よく眠れたか？」

緑「うん」

浩太「やっぱりな」

×　×　×

照明のオペレーションをしている阿川。

×　×　×

茜「ごめん良介。今日も一緒に帰れない」

啓司「そんな気はしてた」

茜「もう少しで完成するから」

啓司「作品作りに専念するのも良いけど、就活はどうなんだ？」

茜「就活はしない」

啓司「え？」

×　×　×

じっと舞台を見ている橋岡。

×　×　×

美央「……一緒にしないでよ」

昇平「え？」

美央「お兄ちゃんと一緒にしないでよ！」

昇平「ひかり……」

美央「目標もないのに予備校に行って、それ

で成績も上がらない私なんて、どうせ落ち
こぼれだよ……」
昇平「そんな風に言ってないだろ」
美央「もううんざり！　お兄ちゃんなんか大
っ嫌いッ」
×　×　×
じっと舞台を見つめている麻美。
×　×　×
啓司「忘れ物しちゃったよ。（と上手から入
ってくると）何だ、お前もいたのか」
寿梨「良助先輩、最低ですね」
啓司「何だよ急に」
寿梨「笑理先輩がいるのに二股かけるなんて」
啓司「疲れたんだよ、こいつといるのが」
茜「良助……」
良助「一緒にいるときだって、話すことは作
品のことばっかり。だから別れようと思っ
たんだよ」
寿梨「いくら別れるつもりでも、二股かけら
れた先輩の気持ちも考えてくださいよ」

茜「萌、もう良いから」

×　×　×

じっと舞台を見つめている田所。

×　×　×

美央と茜が、ベッドに見立てた並べられた木箱で横になっている緑に寄り添っている。

美央「智香ちゃん……」

緑「翔は？」

茜「こっち向かってる」

緑「そう……。ちょっと休むから、翔が来たら起こしてね」

茜「分かった」

美央「おやすみ」

茜「翔ったら、何してるんだか」

と、下手から浩太が駆け込んでくる。

浩太「智香姉！」

茜「待ってたんだよ」

美央「智香ちゃん、翔が来たよ（と起こそうとする）」

が、緑（智香）は起きない。
美央「智香ちゃん？」
茜「智香ちゃん……？（と体を揺らし）智香ちゃん……」
浩太「嘘だろ……」
美央「嫌だよ……ねえ、起きてよ！」
浩太「おい、目開けてくれよ！　俺、医大合格したんだぞ……姉ちゃんッ……。姉ちゃん！（と抱きかかえる）」
×　×　×
目を潤ませて舞台上を見ている佐代子。
×　×　×
指切りをしている美央、浩太、茜。
三人「♪ゆびきりげんまん　うそついたら
はりせんぼんのます　ゆびきった」
浩太「じゃあな（と上手にはけていく）」
美央「また会えるよね」
茜「うん、また会えるよ」
美央「急に寂しくなってきちゃった」
茜「分かる……」

美央「ずっと一緒にいた人が離れるのって、
こんなに悲しいんだね」
茜「それ、恋かもよ」
美央「え！？」
茜「何てね、冗談」
美央「もう、笑理ちゃん！」
茜「（観客席を指さして）あ、翔、こっちに
向かって手振ってる」
美央「本当だ」
大きく手を振り返す美央と茜。
美央「大学、頑張ってね！」
茜「電車来ちゃったよ！。ほら、急いで」
美央「バイバーイ！」
雅也、流れているＢＧＭのボリューム
を大きくすると、ゆっくりと緞帳が下
がっていく――下がりきるまで、いつ
までも手を振り続ける美央と茜。
拍手をしている観客たち――感極まっ
た顔で拍手をしている佐代子、田所、
橋岡、涙を拭いている麻美。

安堵した笑みを浮かべている雅也。

10　同・表

雅也、佐代子、山中、田所、阿川、茜、浩太、啓司、昇平、直海、美央、緑、寿梨、麻美、橋岡が集まっている。

佐代子「皆さん、本当に素晴らしい作品でした。初めての演出を担当したうっちーお疲れさまでした。そして、演出助手として支えていただいた阿川さん、監修という立場で見守っていただいたヤマさん、ありがとうございました」

一礼をする雅也、山中、阿川。

佐代子「では、最後にうっちーから一言」

雅也「はい。円陣を組む前にも言いましたが、本当にこの本番に至るまで、力不足で皆さんには迷惑をかけるばかりでした。でも、今日の舞台を音響オペしながら見ていて、本当に良い作品になったなと思いました。こういう作品になったのは、皆さんの努力

の賜物以外考えらません。本当にありがとうございました（と深々と頭を下げる）」

拍手をする一同。

佐代子「では、今日はゆっくりと休んでください。今後のことは、また全体ＬＩＮＥで連絡します。お疲れ様でした」

一同「お疲れさまでした」

と、それぞれ解散していく。

雅也「あの、国枝さん」

佐代子「どうしたの？」

雅也「実は……三月末で、『スリジェネ』の代表を下りようと思ってます」

足を止めてそれぞれ振り向く茜、浩太、山中。

雅也「『スリジェネ』は、国枝さんが作られたものです。代表として決定権を持った総合プロデューサーになるべきだと、僕は思います」

山中「……」

茜「……」

浩太「……」

佐代子「そう……。分かったわ。私が、四月から全てにおいての代表と決定権も持つわ」

雅也「それが、総合プロデューサーとして一番良いんです。この約半年、代表とは言いながら、何もそれらしいこともできませんでしたし、決定権もありませんでしたから」

佐代子「……」

雅也「三月までは、代表として職を全うします」

佐代子「ご苦労様でした……うっちー」

一礼して、その場を去っていく雅也―

―立ち尽くしている山中、茜、浩太。

11　木内家・雅也の部屋（四月）

雅也がパソコンで仕事をしている。

N「新年度になり、僕は『スリジェネ』の代表を下り、運営スタッフ専任となりました」

つづく